

# 発達検査と対人援助学

## ⑮ 正しさの罭

大谷多加志

### 正しさを積み上げる

起こるとは想像もしていなかったロシアのウクライナ侵攻から2年が経ち、収束しない間にイスラエルのガザ侵攻も始まりました。どちらの地域でも数多くの人々が犠牲になり、とりわけ若年者の多いガザ地区での犠牲者には子どもも多数含まれています。時折流れてくるニュースに対して、痛ましさや悲しみ、怒りも感じるものの、世界のどこかで子どもの命が刻々と失われている事実を知りながら、何もできないまま、安全な国で「ひとりひとりの子ども大切に」「子どもの発達ニーズに合わせて…」などと語ることに何か言い知れない後ろ暗さを感じてしまいます。そんなことを考えながら、頭に思い浮かんだのはここ半年くらいの「学び」についてでした。今回はこの内容について少し振り返ってみようと思います。

ここ半年くらいの学びに共通している点が「正しさに潜む危うさ」ということだったように感じています。前号で報告した対人援助学会の中で「被害と加害を超えて」という言葉が記憶に残りました。一見して、「ノーサイド」や「誰かを責めるのではなく…」みたいな綺麗ごとっぽいお話なのかなとも思えたのですが、身近なところでも「よくある対人トラブル」について、“自分の方が先に被害を受けたこと”、“自分もやり返

しているが、程度は相手の方がひどいこと”を力説されるケースが重なっていたことから、少し立ち止まって考えるべき事柄であるように感じられました。確かに「被害」を受けたことは、反撃をする理由にもなりますし、被害を償ってほしいという主張にも正当性が生まれます。ともすると、加害者擁護や被害者バッシングに見えかねないので、語る事がとても難しく感じるのですが、「被害を被害として語る」というプロセスが、やや省略されているのかもしれないと感じます。起こった事実や、そこで自身が感じたことをそのまま語ることは、正しさの表明や相手への非難とは、質が異なります。対人援助学会における被爆の語りには、この「被害を被害として語る」ということが前面に出ていたように感じました。もちろん、被害の弁済や加害者の責任追及を否定しているのではなく、これもまた必要なプロセスだと思います。しかし、一昔前の「勝ち組-負け組」や「論破」のブームにも表れているように、「どちらが正しいか」に焦点が当たり過ぎている傾向には、やはり注意が必要なのかもしれません。実際のところ、先ほどの「対人トラブル」についても、最終的には「それで、これからはその人とどう関わりたいの?」ということが、本質的には当事者の方も語りたいたいと思っておられたことだっ

たのですが、どうしても自分の正当性を確保してからでないと語りにくいと感じる部分があったように見受けられました。“自分が感じたこと”や“自分がしたいこと／したくないこと”をそのまま語ればと思うのですが、正しいこと以外は語りにくい空気が醸成されてしまっているという部分もあるのかもしれませんが。

だからこそ、「それ自体の正しさを疑えないもの」について、表面的な正しさだけで完結してしまわないように、注意する必要があると感じました。

先日、年4回シリーズで開催されている【『木陰の物語』で家族の構造理論を読み解く会】に参加しました。団編集長のお話と「木陰の物語」を題材に参加者同士で話をするオンライン・ワークショップなのですが、先日の回で紹介されていた「木陰の物語」は、家出した高校生の娘を巡る家族のお話でした。その中での親の語り「成績なんてどうでもよくて、娘がやりたいことをしてくれたら…」という言葉があります(正確ではないですが、大意ではこういう意味の語りでした)。

今の日本社会では、「成績なんてどうでもよくて、娘がやりたいことをしてくれたら…」という考えは、基本的には“正しい”と判断されているように感じます。「何が何でも一流大学に入れる！そのためには自由を奪って勉強させる！」という考えは、むしろ批判的に見られるでしょう(なぜか結果的に成功すると肯定されるという向きもありますが)。ともかく、この物語の中では「娘の家出」が、親の「成績なんてどうでもよくて、娘がやりたいことをしてくれたら…」とい

う表面的な語りを揺さぶります。高校に行かず家出することを「やりたいこと」と認めて応援できるのか…?と問い返されるわけです。

【家族の構造理論を読み解く会】では何かひとつの答えが示されるわけでもないですし、「やりたいことをしてくれたら…」と言うなら何でも受け入れるくらいの覚悟を持って！みたいな精神論が語られたりするわけでもないです。ただ、この物語でもそうなのですが、“正しさ”という点では疑いがないことについて、深く掘り下げないままに語り続けることには注意が必要であると感じました。「多様性の尊重」という言葉も同様で、「みんな違ってみんないい」というのは間違いではないと思いますが、多様な価値を認め合うというのは、自分と全く異なる価値基準や判断基準を持つ人と、それでも隣人として(時には家族として)生きていくということですから、当然ながら葛藤や衝突も起こります。そうやって、一人の個人としてぶつかりながら、一緒にいられる落としどころを作っていく…というのは、結婚したカップルが、互いに異なるそだちや生活習慣による衝突を繰り返しながら、やがて新しい文化を作っていく過程と似ているかもしれません。そういえば、離婚するカップルも少なくない現代です。多様性の尊重というのは、好きで一緒になった人同士でも難しいことを、たまたま隣になった人とやってみようという試みとも言えますので、言うほどに容易なことではないと思っておいた方がよさそうです。前号の編集後記にも書いたのですが、先日の対人援助学会の折に多様性の尊重について表面的に語られていることに違和感を持ち「もっとド

ロドロしたものなんですよ！」と語っておられた方がいたことが思い出されました。

この視点に立つと“良いもの”と信じられているものが、きちんと扱われない中で機能不全を起こしているケースは少なくないように感じます。基本的に正しくて良いものとされている「民主主義」が機能不全を起こしていることは肌身で感じますし、「コロナ対応や経済対策では独裁の方が成果をあげている」という主張もあります。ここで“だからいっそ独裁の方がいい”という話でもなく、“そもそもなんで独裁をやめようって考えが広がったんだっけ？”と立ち返れば、そんな話で済むはずありません。

考えてみれば、私たちの社会は「正しいこと」とされることを積み上げてきたはずで、確かに、30年前に会社や学校で見かけた強烈なハラスメントは少なくとも表面的には見る機会が少なくなりましたし、サービス残業や超過勤務も、ある程度は軽減されているようにも見えます。経済成長のためにインフラ基盤を整えてきたことで、移動が速く便利になったことも間違いありません。しかし、その結果として本当に社会が豊かになり、そこで暮らす人々の幸福度が増したかと言えば、なかなか厳しい現実がありますし、「子どもが生まれてこない社会」ができあがってしまったという現実もあります。

少子化の背景として、若者に経済的な余裕が少ないことが指摘されていますが、これは理由のごく一部に過ぎないと思います。そもそも俯瞰してみれば、子どもはむしろ経済発展の途上にある国の方が多く出生する傾向があることは明らかです。実際の背

景はもっと根深く、もっとドロドロとしたところにあると感じます。

### 正しさに依拠せずに語る

最後に少しだけ現場的なことと絡めてみると、「相反する意見を併存させること」はケースの見立てや議論の中でも必要な力であると感じます。相反する考えが提示された時に「どちらが正しいか」という思考にとられてしまう場合、すでに「正しさ」の罠にはまっているのかもしれませんが。

一人の人間の中に相反する考えや側面があるということは全然あり得ることです。それは私たちひとりひとりが自分の考えや行動を振り返れば、十分確かめることができるくらい明らかなことだと思います。そして、そのうち「どちらが本当の自分であるか」などと問う必要もなく、「どちらも私の一側面である」と考えるでしょう。

子どもの発達の見立てにおいても「パターンで落とし込む」や「基準に当てはめる」形で解釈したいと考える人もいますし、ある程度の解釈ができるように作られている検査もあります。その解釈は基本的には“正しい”と思いますが、実態をどの程度反映できているか、それが本当に有用な情報になるかは別の話です。効率や損得勘定（正しいとお墨付きがある）を考えればこの誘惑が強いことはわかりますが、ここが過剰になるのは講座の中で語られていた「異質なものと関わることをさぼっている」ことになるのかもしれませんが。大人とは異なる子どもの世界を、そうであると理解した上で知ろうと歩み寄る取り組みは、多様性の理解と同じくドロドロを含んだ試みなのかもしれません。